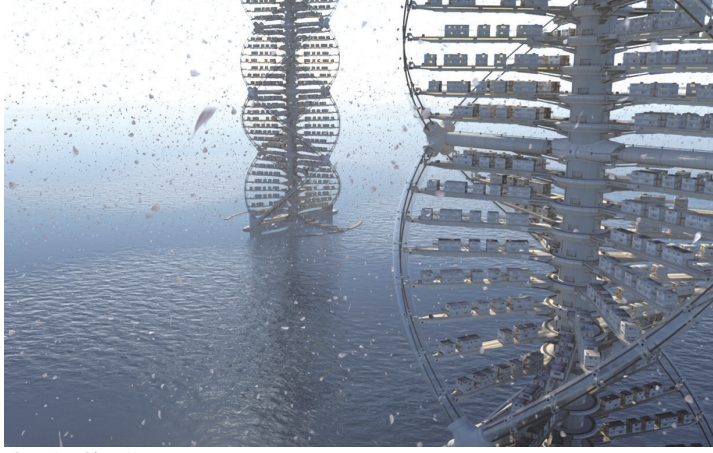


21世紀の海外で
日本の素敵を再発見
NEO JAPON
ネオ・ジャポン



©Pierre-Jean Giloux, 2015

ピエール＝ジャン・ジルー

フランス人現代アート作家。ビデオ4部作、『Shrinking City (縮み行く都市)』は我々の記憶から抜け落ちた日本の知らない都市景観を再発見させてくれる。絶妙なスピード感で、映像の中を浮遊する感覚で飛び回れる現代版「道行文」だ。現在4部作の最終作品を制作中。京都の都市景観の変遷を琵琶湖というアングルから捉える。1月17日までパリ4区 Pavillon de l'Arsenal にてグループ展開催中。

www.pavillon-arsenal.com

第10回 —— 昭和の時代がめざした町並み体験バーチャルツアー

フランス人の日本映画好きは有名だが、日本建築のファンもかなりいる。安藤忠雄、伊東豊雄など、日本を越え世界で活躍する建築家がいる。日本の建築デザインにこだわるフランス人アーティストも多い。その一人ピエール＝ジャン・ジルーに聞かれた。「なぜ日本は寺社など何世紀も前の建築を大事にするのに、近代建築物は壊すんだろう」。

彼のこだわりは、60年～70年代、第二次世界大戦後の復興期から高度経済成長期へ移行した時代に生まれた建築運動「メタボリズム (新陳代謝)」だ。日本で生まれ世界で話題になった。廃墟と化した日本がたち上がる中、理想未来都市 (ユートピア) を夢見て壮大なビジョンを発表し、世界をアツと言わせた建築家集団がいた。「世界の丹下」で知られる丹下健三に影響を受けた黒川紀章、菊竹清訓、槇文彦らだ。都市を呼吸、爪や髪、人間の身体とその生命活動の延長として考えた。カプセル型集合住宅や海上都市、岡本太郎の太陽の塔がシンボルとなった70年の大阪万国博覧会の建築はまさに未来都市を体現し、世界的に注目された。黒川紀章の中銀カプセルタワーなど今でも建築物が残っているが、多くは老朽化のため建て替えられる運命だ。

「メタボリズムは日本が世界に発信した世界遺産なのに」と

嘆くピエール＝ジャンは、68年に磯崎新が発表した「ふたたび廃墟となったヒロシマ」という展示作品に心を揺さぶられた。原爆投下後の広島をもとに広島の未来の姿が提示されている。「焦土と化して何もなるところから、日本は今日のビル群の立ち並ぶ驚くべき都市環境を作り出した。戦後期、絶望とハングリー精神の中から世界でも稀なる想像力、デザイン力、イノベーション力で自ら未来を作り出した」と興奮気味に語る。しかし実際来日すると、戦後の復興期から高度成長期の記憶が都市から薄れつつある状況に気づいた。ピエール＝ジャンは「日本人は名勝や景勝をととても大事にする。日本には昔から『道行文』というのがある」と指摘する。道行文は旅の途中の景色や旅情を綴るものだ。文学では紀行文を生み、能や浄瑠璃などといった芸能にとっても重要な要素だ。「景色を文化遺産と考える日本人がなぜ国の歴史上大事な戦後復興期の都市風景を無視するのか理解できない」と今度は憤慨気味に言う。確かに、一種の集団記憶喪失みたいだ。

様々な疑問は東日本大震災を機に作品化された。「現代版道行文を作ろう」。都市は形状や用途だけでなくその時代の思想や想いを映し出す。日本の50年代後半から70年代の日本の「町並み」をバーチャルなビデオ映像に収めた。DNA

の形をした黒川の有名な「ヘリックス・シティ」や用途にあわせて組み立てる「プラグイン・シティ」、昆虫の脚が生えたような、居住者が指示した場所へ移動する「ウォーキング・シティ」が立ち並び、モノレールが走る。都市がまるで呼吸しているようだ。東京に似ているがどこかレトロでもあり、未来的でもあり、不可思議な空間だ。「メタボリズム」の前衛的な建築には実際に施工されていないものも多い。それがピエール＝ジャンの映像作品の中ではあたかも実存したかのように、東京の都市映像に組み込まれている。本物らしい映像の中にグングン引き込まれていく中、東京はこんな都市になっていたかもしれない、と突然日本の建築デザインの底力のようなものを感じてソクツとした。98年に開催されたパリ回顧展で、故黒川氏から「21世紀こそ人間と自然、理性と感性の共生の時代だ」と聞いたのを思い出す。

profile

大江ゴティニ純子

在仏アート・プロデューサー。Palais de Tokyo のゼネラル・コーディネーター、フランス現代アート基金のゼネラル・マネージャーなどを歴任し、現在はパリ大学で講師、国立美術館やアート・センターでの企画に携わる。京都の仏政府在外文化機関「ヴィラ九条山」特任館長。www.villakujoyama.jp